

第 4 節 土器すてばの研究

1. はじめに

釈迦堂遺跡群・三口神平地区（S－Ⅲ・S－Ⅳ・N－Ⅲ・N－Ⅳ区）の土器すてばを題材として行なった分析とその結果について報告する。土器すてばと認定した土器集中箇所は三つある。土器すてばA・B・Cであり、各々の概要は既に記述されている。

さて、本論に入る前に予め言及しておくべきことがある。まず、筆者の分析は三口神平地区の三つの土器すてばのうち、土器すてばA・Bを対象とする。土器すてばCは、実は住居址として整理してきたが、再考の末土器すてばとして報告することにした。ただしCは性格的にA・Bと同列に扱いかねる。故に今回はA・Bのみをとり上げている。⁽¹⁾

次に、筆者はこの分析で土器のみを対象とした。一般に土器捨て場という呼称が定着し、釈迦堂でもその名を冠したが、土器のみならず石器・土製品・自然遺物なども存在することは周知の事実である。土器のみの分析では一面的だと言われざるを得ない。しかし土器すてばの遺物を土器で代表させて議論することは妥当であると考えている。なお4.項の分析においては中期のみを考えている。⁽²⁾

上記の点を含め、時間的制約から切り捨てた部分はあるが、現時点でできるだけ成果を上げるべく努めた。以下に本論に入る。

2. 分析の目的と方法

所謂土器捨て場は、近年とくに調査報告事例が増加し、土器捨て場そのものを扱った論文も発表されている（中野1984）。それらの成果は、土器捨て場研究の今日的課題を明らかにしている。筆者はそれら課題を念頭に置いて釈迦堂遺跡の土器すてばの分析に臨んだ。即ちこの論稿の目的とは以下の様な点である。

1. 土器すてばの土器の分布状態を具体的に分析し、その分布を出現せしめた廃棄行動を復元する。これは従来の研究が土器捨て場を廃棄の場として認識してきたことを受けて、より細かい分析を経て論拠を得、廃棄の実態に迫ろうとするものである。
2. 土器すてばの動態を考える。釈迦堂の土器すてばは中期の全型式を含むが、その生成発展の具体像を明らかにしようとするものである。これはさらに進んで、集落全体の動態の中に土器すてばを位置づけることをも目論むものである。

前者の目的に対しては、土器すてば内・内外の接合関係を中心に土器分布状況の実態を調べることにした。後者の目的に対しては、土器の重量計算・個体数試算を行ない、集落全体と土器すてば、また土器すてばAとBの関係などを数量的に捉えることにした。

各々の方法について基礎資料となったデータを若干説明する。まず、土器すてばA・Bの平面図が作られている（第91図、第544図、第571図）。発掘現場において、比較的大きな破片と顕著に集中していた破片についてはナンバーを付け、他はグリッド一括として取り上げた。よってナンバー付土器については、出土位置を平面図上に特定することが可能である。このナンバー付土器で接合関係を持つものを主に、土器すてばAの接合関係図を作った⁽³⁾（挿図32）。また調査者が現場でブロックとして認識した破片集中部分は、同じナンバーが付けられているので、その内容を調べる事が可能である。

この様にナンバー付土器は資料として有効であるが、いかんせん膨大な量の破片のごく一部であるため、グリッド一括で取り上げた土器も生かしたいと考えた。幸いにも時期別にグリッド毎の土器重量を計測していたので（挿

図41～挿図46)、このデータを利用してもう一つの目的に沿った分析を行なうこととした。このデータの具体的な扱いに関しては4. 項で述べる。

3. 土器すてばにおける土器の分布状態について

——廃棄行動の復元——

近年の報告書は調査区域内の遺物の接合関係図を掲載することが多く、それらを見るにつけ遺物分布を出現させた諸要因の複雑さを痛感する。この節では、土器すてばの土器分布状態を、廃棄という視点から分析・解釈しようとするものである。⁽⁴⁾

土器すてばA内の接合関係を調べる過程で、その接合関係を大まかに4つに類型化することができた。⁽⁵⁾

- (1) 同一土器の破片がブロックとしてまとまる
- (2) 同一土器の破片が1グリッド内もしくは隣接グリッド間程度の狭い範囲で接合関係を持つ
- (3) 同一土器の破片が土器すてば内の広い範囲で接合関係を持つ
- (4) 土器すてば外と接合関係を持つ

この接合関係の4類型に沿って、土器分布のあり方を述べ、廃棄行動について考えてみよう。

ブロックについて

同一土器の接合関係という視点から類型(1)を設定したのだが、ブロックの内容という視点からすれば、それをも含めた別個の類型化が可能である。即ち

- ① 完形1個体の土器から成るブロック⁽⁶⁾
- ② 同一土器の破片から成るブロック
- ③ 完形土器もしくは同一土器の破片を中心に他の土器の破片若干を含むブロック
- ④ 全く別個の土器の破片から成るブロック

上の様なブロックについて考える際、そのブロックを「単位廃棄」(一度の廃棄)と仮定して話を進めることは有意義である。無論、現場でブロックとしたものを安易に単位廃棄とすることはできないが、もとの図面を吟味して、単位廃棄と認めるに値するブロックを選んだ。即ち挿図32のA～Iである。いずれも土器すてばAの周縁部に位置するが、それは遺物の集中著しい中心部でブロックを抽出し難かったことに因る。⁽⁷⁾

ブロックA～Iの大体の内容は付表1で説明している。先の①～④に照らせば

- ①……ブロックG
- ②……ブロックI
- ③……ブロックA・C・D・E・H
- ④……ブロックB・F

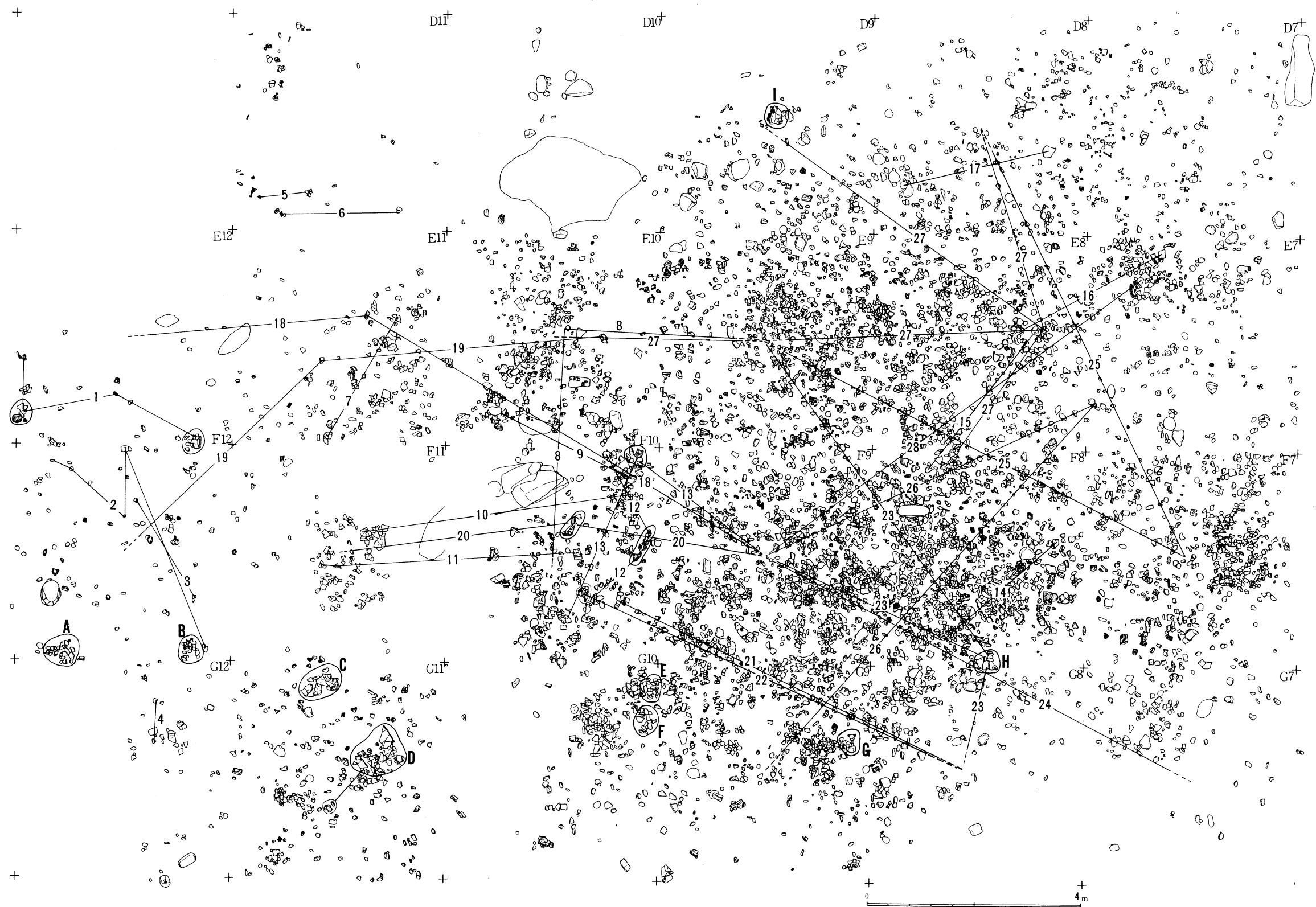
となる。

それでは①～④の様なブロックを生ぜしめた廃棄行動はいかかなものであったか考えてみよう。

- ① 集落で破損した(使用不能となった)土器1個体を、そのまま土器すてばに運んで廃棄した。
- ② 集落で破損した土器の破片の一部を土器すてばに廃棄した。
- ③ 集落で破損した土器1個体もしくはその一部を、他の破片ととりまとめて土器すてばに廃棄した。
- ④ 集落で破片をとりまとめて土器すてばに廃棄した。

以上が筆者の想定した廃棄行動である。重要なのは、③・④のブロックがともに別個体の破片さらには異型式の破片をも含む事実である。単位廃棄と仮定すると、この現象は土器破片のとり集め作業つまりは清掃活動を反映していると考えられる。

①～④の廃棄行動について、二つの動機を考えることができる。土器の破損と清掃である。それらはいずれもごく日常的な生活の中で生じる動機である。つまり、土器すてばは往時の日常生活の折々に、必要に応じてなされた廃棄の集積であると考えられることができる。

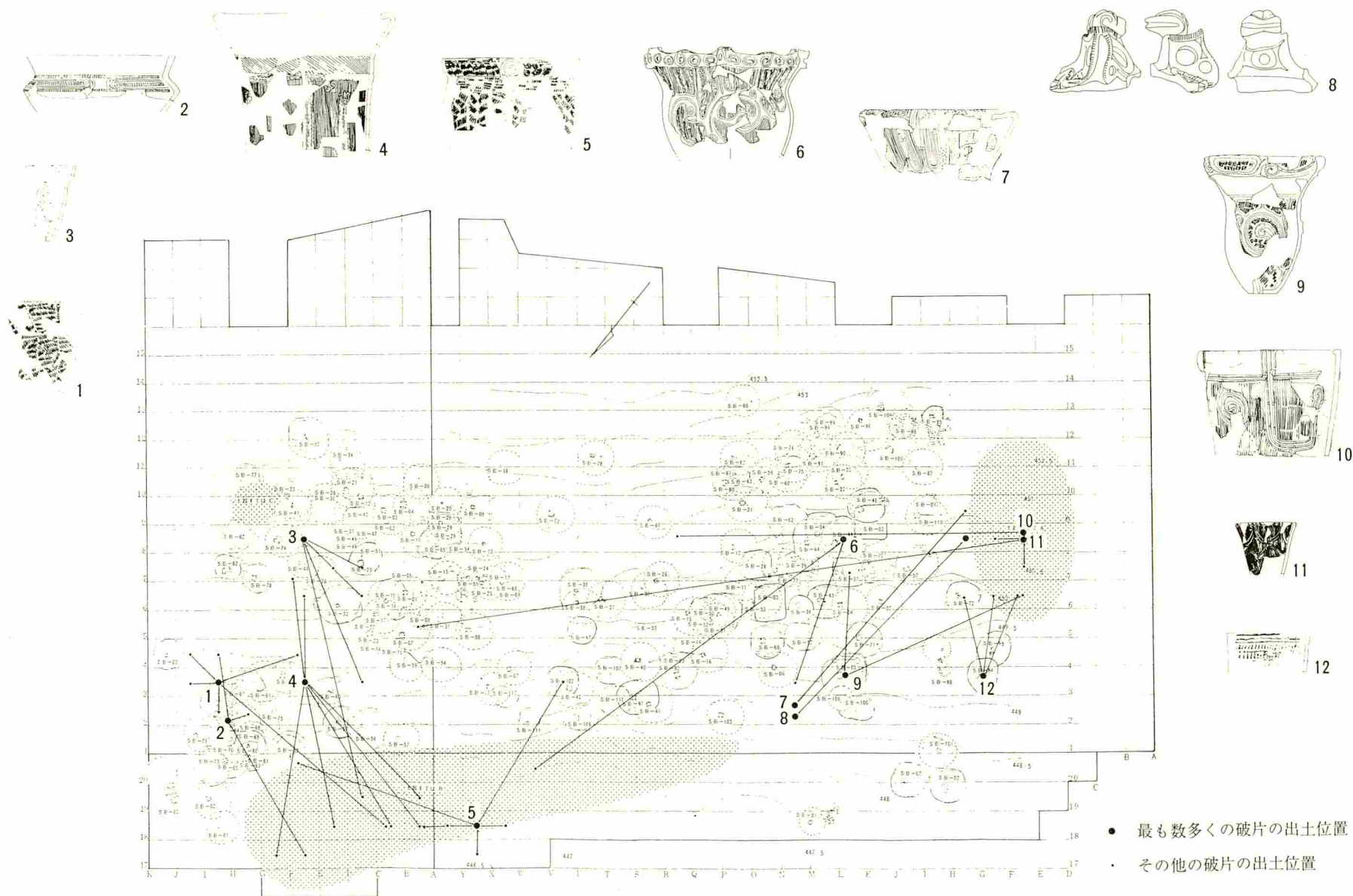


挿図32 土器すてばA内土器接合関係図

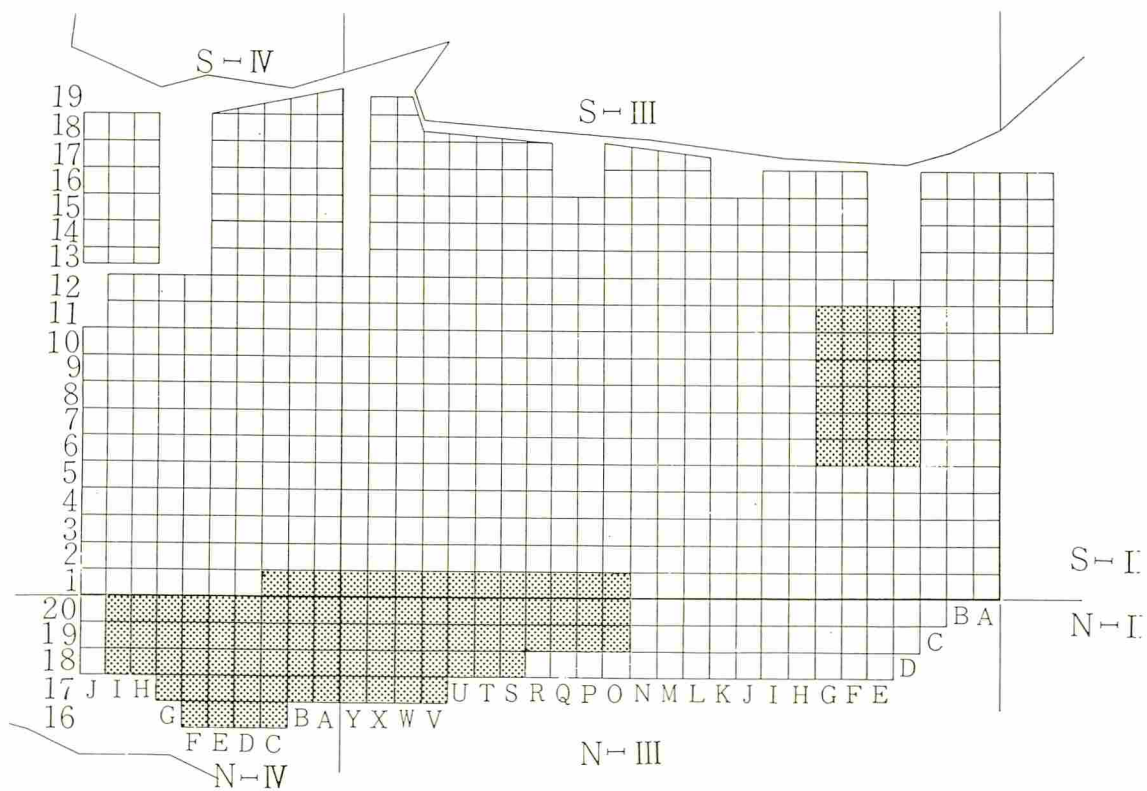
付表1. 土器すてばA内土器接合関係図付表

接 合 関 係							
接合番号	出土グリッド・土器ナンバー	概 要	土器図 版番号	接合番号	出土グリッド・土器ナンバー	概 要	土器図 版番号
1	E-12 No.2、No.3、No.7、 No.11 いずれも日付は810722	曾利式の口縁部～胴部破 片	第201 図43	15	E-8 No.1 810319 F-8 No.8 810319	曾利式初頭の土器の口縁 部～胴部破片	第194 図6
2	F-12、No.2 810722、No.1 810725、No.19 810722、No.3 810722、No.6 8110725	井戸尻式の胴部破片		16	E-7 No.129 810427 E-8 No.2 810312	曾利式の口縁部～胴部破 片	
3	F-12 No.18 810722 No.3 810725	藤内式の口縁部～胴部破 片		17	D-8 No.1 810319 No.4 810319	縄文のつく胴部～底部破 片	
4	G-12 No.2 810519 No.5 810519	胴部破片		18	E11 No.4 810514 E-12、F-9	曾利式の胴部破片	
5	D-11 No.7 810519 No.13 810519	新道式の胴部破片		19	E-10 No.7 810515 E-11No.5 810512、F-12	井戸尻式の胴部破片	
6	D-11 No.8 810519 No.9 810519、No.15 810519	新道式の胴部破片		20	F-10、F-9、F-11	F-10グリッドの1ヶ所 に口縁部の一部が並ん でいる。	第200 図38
7	E-11 No.3 810514 No.15 810521			21	F-10 No.1 810319 G-8	曾利新式の胴部破片	
8	E-10 No.4 810306 E-9、F-10	曾利縄文系土器の口縁部 ～胴部破片		22	F-10 No.1 810310 G-8	底部	
9	E-10 No.4 810515 F-10 No.18 810310	曾利式初頭の口縁部～胴 部破片		23	F-8 No.3 810319 F-8、G-8、E-9 F-9	井戸尻式の胴下半部～底 部破片	
10	F-10 No.10 810312 F-11 No.16 810515			24	F-9、G-7	曾利式の胴部破片	
11	F-10 No.4 810310 F-11 No.7 810505 No.14 810526、No.21 810515	井戸尻式の口縁部～胴部 破片		25	F-7、D-8、E-9	曾利式の口縁部～胴部破 片	
12	F-10 No.6、No.14、No.3 No.7、No.8 いずれも日付は、 810312	井戸尻式の口縁部～胴部 破片。口縁部は1ヶ所に 並んでいる。		26	E-7 No.124 810427 G-9、F-9	井戸尻式の口縁部破片	
13	F-10 No.10 810310 No.19 810310、F-9	曾利式の胴部破片		27	E-8 No.9 810428 F-8 No.10 810319 E-9、E-10、D-8 D-9	曾利式の胴部破片	
14	F-8 No.1 810315 No.8 810315	曾利式の胴部破片		28	E-7 No.126 810427 F-9	曾利式初頭の口縁部～胴 部破片	

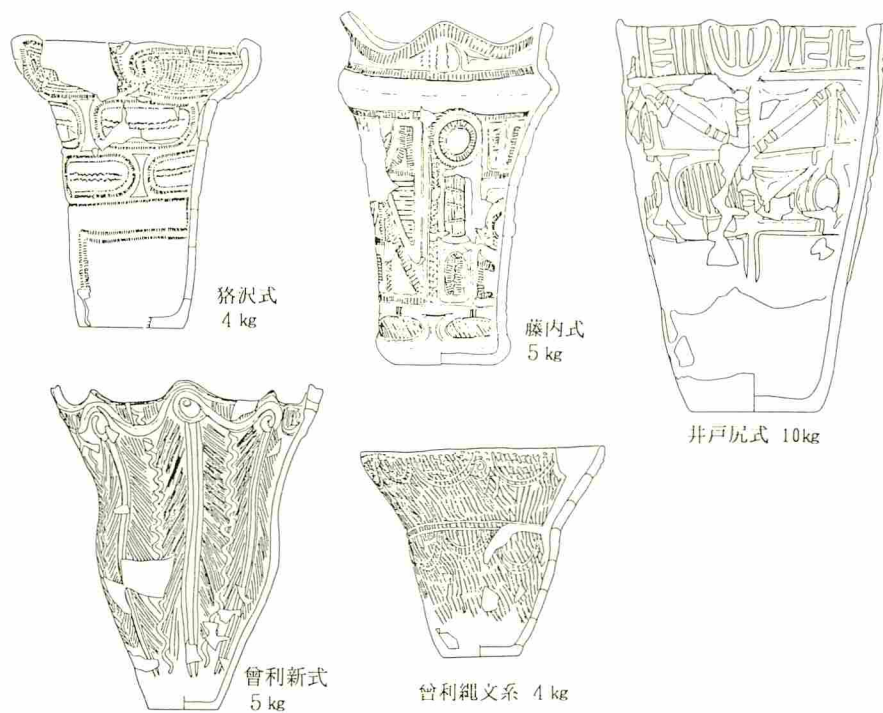
ブ ロ ッ ク					
ブロッ ク番 号	出土グリッド・土器ナンバー	概 要	ブロッ ク番 号	出土グリッド・土器ナンバー	概 要
A	F-12、No.17 810722	藤内式の同一土器の破片多数と、 他に様々な藤内式破片	F	G-10、No.2 810309	井戸尻式の様々な口縁部・胴部 破片
B	F-12、No.16 810722	藤内式の胴部破片、井戸尻式の 胴部・底部破片	G	G-9、No.4 810310	井戸尻式一個体が図上でも器形 が分かる程まとまっていた。残 念ながら土器が行方不明となり 実測図はない。
C	G-11、No.3 810508	井戸尻式の口縁部～胴部とその 他の井戸尻式の口縁部数片、新 道式口縁部、藤内式口縁部破片	H	F-8、No.3 810319	井戸尻式の口縁部～胴部（第19 5図8）。他に別個体の井戸尻 式の胴下半部破片があり、それ が23番の接合関係を示した（第 195図9）。
D	G-11、No.10 810508	井戸尻式一個体の口縁部～胴部、 底部（第196図13）。別の井戸 尻式破片が図示した接合関係を 持つ。他に様々な井戸尻式破片	I	D-9、No.3 810313	加曾利E式の口縁部～胴部（第 201図49）。
E	G-10、No.1 810309	曾利式初頭の一個体（第198図 27）の他、井戸尻式の底部、把 手、胴部など様々な破片			



挿図33 土器すてば関連の広域接合関係図



挿図34 土器すてばグリッドの設定



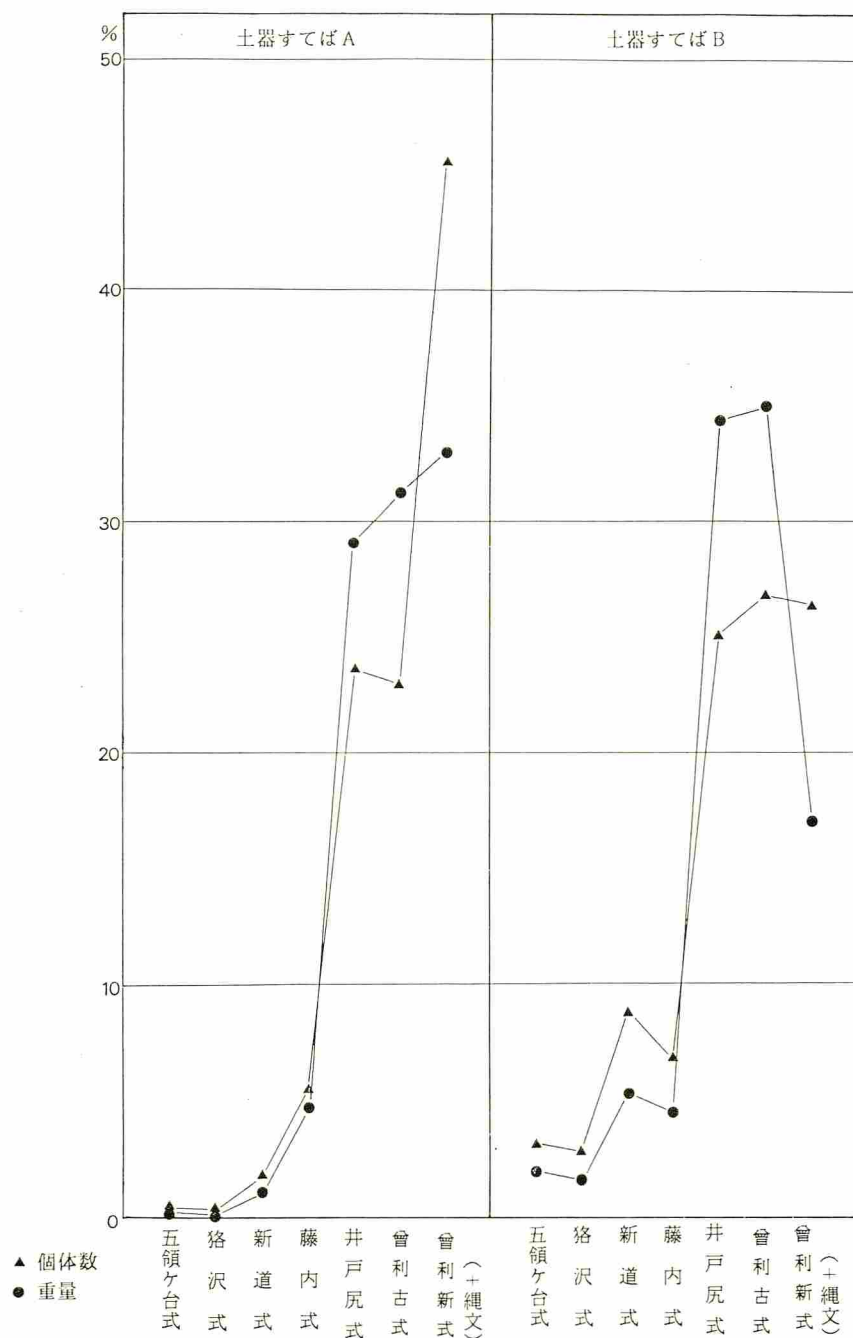
挿図35 土器の重さ

時期	グリッド 層重量 g	土器すてば A + Bg	土器すてば A g	土器すてば B g	土器すてばA			土器すてばB		
					個数	図	計	個数	図	計
五領ヶ台式	238164	118778	5140	113638	1.3	0	1.3	28.4	1	29.4
貉 沢 式	161463	95300	4427	90873	1.1	0	1.1	22.7	3	25.7
新 道 式	550506	323366	22350	301016	5.6	0	5.6	75.3	5	80.3
藤 内 式	757568	342084	86685	255399	17.3	0	17.3	51.1	11	62.1
井戸尻式	2775497	972120	251485	720635						
無 文	3185508	1507324	275330	1231994						
計	5961005	2479444	526815	1952629	52.7	22	74.7	195.3	32	227.3
曾利古式	2501095	1001990	269980	732010						
無 文	2870590	1547336	295895	1251441						
計	5371685	2549326	565875	1983451	56.6	16	72.6	198.3	45	243.3
曾利新式	2746976	668780	315445	353335	63.1			70.7		
加 E 縄文	2011428	898868	281415	617453	70.3			154.3		
計	4758404	1567648	596860	970788	133.4	11	144.4	225	15	240.0
中期 計	17798795	7575946	1808152	5667794			317.0			908.1
(堀之内)	314245	77290	45905	31385						

付表 2 土器重量・個体数基礎データ一覧表

	重 量		個 体 数	
	土器すてばA	土器すてばB	土器すてばA	土器すてばB
五領ヶ台式	0.3%	2.0%	0.4%	3.2%
絡沢式	0.2	1.6	0.4	2.8
新道式	1.2	5.3	1.8	8.8
藤内式	4.8	4.5	5.5	6.8
井戸尻式	29.1	34.4	23.6	25.0
曾利古式	31.3	35.0	22.9	26.8
曾利新式	17.5	6.2		
縄文	15.6	10.9		
(新式+縄文)	(33.0)	(17.1)	(45.6)	(26.4)
計	100.0	100.0	100.0	100.0

付表3 土器すてば内時期別重量・個体数の割合



挿図36 土器すてば内重量・個体数の変遷

土器すてば内接合関係について

挿図32に線引きして示した接合関係のうち1番～17番を類型(2)（比較的狭い範囲で接合する）、18番～28番を類型(3)（比較的広い範囲で接合する）とした。挿図32は確認し得た接合関係全てを網羅した訳ではない。ごく近くの接合例、ナンバーが無いので出土地点が再確認できない破片ばかりの接合例などで省いたものがある。図の線の先を点線としたのは、グリッド一括で上げた、ナンバーの無い破片との接合を示す。

さて、接合距離の長短から二類型に分けた形となったが、想定し得る廃棄行動にも差異がある。

(2) 一度に廃棄された同一土器の破片が、廃棄の際に狭い範囲に散らばった。あるいは一度に廃棄された同一土器の破片が、廃棄後小規模な攪乱を受けた。

(3) 同一土器の破片が別の機会に廃棄された。あるいは一度に廃棄された同一土器の破片が、廃棄後大規模な攪乱を受けた。

主に(2)を単位廃棄、(3)を同一土器の別機会の廃棄と結びつけた。近くに散らばっていたとしても、別々の機会に廃棄された可能性を否むものではないが、ここではその別々の廃棄の意味が重要である。これは集落内において既にバラバラになっていた土器の破片が、それぞれ別個に清掃せられて、別の機会に土器すてばに運ばれたことを示すと考える。類型(2)・(3)もまた集落内の日常的な清掃活動と結びつける解釈が可能である。

攪乱についてつけ加えれば、土器すてばAは杭の13列から7列の方向に傾斜しているが、傾斜方向の接合関係ばかりでなく直交方向のそれも多い。自然の営力による攪乱を特別に重視する必要はないと考える。一方、すてば中心部に破片の集中著しく、ブロックの認定が困難であったことは、その部分の人為的攪乱が激しかったことを示していると考える。

以上、土器すてばA内の接合関係を中心に考察した結果、集落内の日常的な清掃活動による廃棄を想定するに至った。既に土器捨て場をゴミ集積場として位置付けた中野修秀氏の論文があり（中野1984）、集落内における清掃行為をも考慮している。釈迦堂の土器すてばに即した筆者の解釈も、中野氏の見解を基本的⁽⁸⁾に支持している。

土器すてば内外の広域接合関係について

土器すてばA・Bについて類型(4)の事例（土器すてば外と接合関係を持つ）を挿図33に図示した。全ての事例を示した訳ではなく、典型的かつ顕著なものを選び出している。

出土位置の組み合わせは様々である。

・土器すてばと住居址（覆土）

挿図33の2、6、9、12番

・土器すてばと土壙（覆土）とグリッド

4番

・土器すてばとグリッド

1、3、5、7、8、10、11番

前項で述べた様な清掃活動に即して言えば、既に破損し散在していた土器破片の一部が清掃されて土器すてばに廃棄され、一部が住居址や土壙の覆土中に廃棄され（あるいは流入し）、一部は清掃されずに残った。攪乱要因まで考慮すれば、土器破損後の破片の行方はそれこそ千差万別であったことになる。

さて、土器すてば内外に亘る接合関係を調べるについては、筆者はいくつかの見通しを持っていた。まず、三口神平地区の集落の二極（半月形を呈する集落の両端部の住居址密集地）と土器すてばA・Bが、各々対応することが証明できないかと考えた。確かに土器すてばとそれに近い住居址密集地との接合関係が一般的である。しかし6番の様な例外もあり、いちがいに模式的な解釈はできない。また逆に、二つの土器すてば間で頻繁に接合して、三口神平地区集落全体が二つの土器すてばを共用したことを証明できないかとも考えた。が、接合作業の中ではその様な事例は確認し得なかった。よって、土器すてばA・Bの使い分けという点に関しては、その是非いずれも確証を持ち得なかった。

土器すてば内外に亘る広域接合関係は、予想以上に数多く接合距離も大きかった為、興味深いものであった。し

かし、土器すてばの破片と接合する土器が住居址から出ているからと言って、その土器がその住居址に帰属するものと決めつけられないのは明白なことである。よって接合関係から集落（居住区域）と土器すてばの具体的な関係を推察することは、非常に難しいことだと思われた。

4. 土器すてばにおける土器の重量計算・個体数試算の結果について

——土器すてばの動態——

先述した通り、時期別・グリッド毎の土器重量計測値を利用して、土器すてば出土土器の数量的把握に努めた。土器すてばの機能の実態ならびに集落と結びついた動態を知る上で、この分析は思いの外有効であった。以下にその詳細を述べる。

基礎データ作製の過程について

基本となったのは挿図41～挿図46の数値である。膨大な量の土器破片が計測対象となった訳だか、破片を仕分けする作業の分類項目は、五領ヶ台式・貉沢式・新道式・藤内式・井戸尻式・曾利ⅠⅡ式・曾利ⅢⅣⅤ式・縄文（加曾利Ⅴ式と曾利縄文系土器）・無文、とした。作業の過程では所謂井戸尻編年を使用したのが、のちに曾利式については別個の体系を考えるに至った。曾利ⅠⅡ式としたものは概ね曾利古式、曾利ⅢⅣⅤ式（Ⅴは少量）は概ね曾利新式にあたるとして、以下は曾利古式・新式の呼称を用いる。

まず、土器すてばA・Bの範囲として挿図34のスクリーン部分を設定する。土器すてばの範囲は本来グリッド毎に一線を画することができるものではない上に、時期による広狭も当然考えられる。しかし量的比較を行なう便宜上、妥当と思われる画一的な範囲を限定する必要があった。

続いて、土器すてばA・B出土土器の総重量を、時期別に算出する。なお三口神平地区全体の総重量については、実は住居址・土壌内出土土器を計測に含めていない。また全グリッドにおいて、石膏復元できるほど残りの良いものは抜き出したあとで計測している。故にこの分析の数字はスタートから限定性を帯びていることを認めざるを得ない。分析の中ではこの限定をできるだけ考慮に入れたり補正したりするべく努めた。

大量の無文破片については、井戸尻式と曾利古式の両者に、その重量比に従って振り分けた。両型式は口縁部・胴下半部などに大きく無文部を有する。加曾利Ⅴ式（曾利縄文系）の縄文の破片は、曾利新式に平行するものが多いと考え、適宜、曾利新式に含めて扱う。この二点の操作は、無視できない量の無文もしくは縄文の破片を、どうにかデータとして生かそうとして行なった措置である。

土器の重量は、時期別に土器の大きさかなりの差異がある為、単純に比較できない。そこで試みに各時期の土器すてばに含まれた土器の重量を土器個体数に置き換えて、比較の基礎とすることにした。個体数は、各型式の1個体あたり平均重量値で総重量を割れば出てくる。問題はその平均重量である。その型式に平均的な大きさで、しかもほぼ完形を保っている土器の重さを測ればよい訳だが、復元個体が千個を超えた釈迦堂においても、適格なのは数個にすぎなかった。挿図35にあげた土器の重さと、筆者の経験にもとづいて、各型式の平均的な重量を以下の様に決めた。

五領ヶ台式	4 kg	井戸尻式	10kg
貉沢式	4 kg	曾利古式	10kg
新道式	4 kg	曾利新式	5 kg
藤内式	5 kg	曾利縄文系	4 kg

この値はその絶対的な数字よりも、相対的な関係の方が重要であると考ええる。

各時期の個体数計算の際、石膏復元され報告書に図が掲載された土器について、その個数を数えて加算した。先に述べた通り、これらは最初に破片と区別され、重量計算の対象とならなかったものである。

以上の手続きを経て作製した基礎データを一覧表とした（付表2）。「個数」とは計算で出した個体数、「図」とは報告書に実測図が載っている個体数である。付表2のデータをもとに分析を行なうが、計算は四則演算の域にとどまる簡単なものである。

遺跡における土器の重量計算の重要性・可能性については小林謙一氏の論文がある（小林1983）。小林氏は数量的把握の目的としていくつかをあげているが、その3番目「遺跡内における土器の数量的な分布や、遺構ごとの土器量の把握より遺跡の空間的な利用のされ方に関するアプローチを行う。」が最も実を結ぶことができるだろうと筆者は考える。釈迦堂の土器すてばは、集落の中でいかに利用された空間であったのか。

分 析

・土器すてばに包含される土器の量

重量計算によれば、中期全体の（厳密には遺構外出土）総重量は17.8トンに及ぶ。うち7.6トン（42%）が二つの土器すてばに包含される。土器すてばAとBの中期重量比は、ほぼA：B＝1：3となる。ちなみにAとBの面積の比は18グリッド：85グリッド＝1：4.7である。

時期毎に、全体の総重量に対する土器すてば包含量（A＋B）の割合をみると

五領ヶ台式	50%
猪 沢 式	59%
新 道 式	59%
藤 内 式	45%
井戸尻式	42%
曾利古式	48%
曾利新式	24%
（曾利新式＋縄文	33%）

となり、一貫して、住居址・土壌に含まれた分を除いた土器量の4割から6割が土器すてばに集中したことになる。中期の終わり、曾利新式期に割合が半減しているのが注意されるが、縄文を含めた割合の方を問題とすべきである。それにしても3分の1である。

曾利新式期の一部の時期に土器すてばCが出現するので、それに補完される可能性がある。そこでS－Ⅳ区G－9グリッドを中心とする9つのグリッドを土器すてばCとして重量計算し、それを加えた土器すてば包含量の割合を出すと約38%であった。いかにせん曾利新式期に土器すてば包含量の割合が減ることは否めない様である。

・土器すてばAとBの比較

土器すてばAとBを比較してみたいかがであろうか。先に算出した個体数をもとに、時期別に対比させてみる。

土器すてばA・B 個体数の比		
	A ： B	
五領ヶ台式	4 %	96 % (1：22.6)
猪 沢 式	4	96 (1：23.4)
新 道 式	7	93 (1：14.3)
藤 内 式	22	78 (1：3.6)
井戸尻式	25	75 (1：3.0)
曾利古式	23	77 (1：3.4)
曾利新式＋縄文	38	62 (1：1.7)

パーセンテージ比と、()内にAの個体数を1としてみた比を出してみたが、この結果が興味深い。同様な数値を示す三つの時期のまとまりに、分けて考えることができそうである。

・五領ヶ台式・猪沢式・新道式期

土器すてばBに対し、Aの割合が極端に低い。これを土器すてばの機能という語に置換えて説明すると、土器すてばBの機能が非常に高い時期ということになる。

・藤内式・井戸尻式・曾利古式期

土器すてばAとBの比が1 : 3程度で安定している。即ち、土器すてばAとBが同等に機能している。

・曾利新式期

土器すてばBの割合が半減する。即ち、土器すてばBの機能が相対的に低下したことになる。

三つの時期とその画期を解釈してみる。五領ヶ台式・猪沢式期は土器すてばAは存在していなかった。Aは藤内式期に機能を確立している。Aの出現の画期は藤内式期よりもむしろ新道式期と考えている。藤内式から曾利古式期まで、AとBは同等に廃棄の対象となる。曾利新式期には、土器すてばAの機能が高まり、相対的にBの機能は低下する。この様に解釈することによって、土器すてばAとBの相対的な動態が把握できたことになる。

・土器すてばA・Bの消長

各土器すてばの消長を、より具体的に示すことはできないであろうか。各々について、すてば全体を100として、時期毎の重量・個体数の割合を計算した結果が付表3、グラフ化したのが挿図36である。

A・Bともに曾利古式までは同様な変遷を示すと考える。即ち、A・Bともに新道・藤内式期に若干、次の井戸尻式期に急激に割合を増やし、曾利古式期に続く。しかし、曾利新式期に至り土器すてばAとBの差が顕著となる。土器すてばAはそのまま増加し特に個体数の割合の増加が著しいが、土器すてばBの重量の割合は半減しているのである。

先の分析で曾利新式期に土器すてばBの相対的な機能の低下を述べたが、それと同質の結果となった。ただし、土器すてばB自体についてみると、重量の割合は半減するが、個体数をみるとほとんど減っていない。ということは、曾利新式期に土器すてばBの機能は決して低下したのではなく、むしろ土器すてばAの機能が著しく増大したという面を、強調するべきであろう。

分析結果のまとめ ———集落の変遷と土器すてば———

釈迦堂遺跡・三口神平地区においては、中期初めの五領ヶ台式・猪沢式段階では土器すてばはBのみであった。⁽⁹⁾これは住居址の位置を見ると首肯されることであって、この時期の住居は集落西側つまり土器すてばAの近辺にはまだ存在していないのである（挿図9、挿図10）。新道式段階で始めてS-Ⅲ区S B-95が西側に出現し（挿図11）、廃棄の場が用意される必然性が生ずる。土器すてばAがまさに形成され始めた時期は新道式期に求めるのがよいであろう。藤内式の段階には数棟の住居が西に伸びて、集落は二極に分かれる（挿図12）。この時期には土器すてばAは廃棄の場として確立し十分に機能を果している。そしてこの土器すてばAが、集落の西縁を限るものとなったことにも意義がある。

土器すてばA・Bともに、井戸尻式段階に土器量が飛躍的に増大した。これは井戸尻式・曾利古式の土器の本来の大きさにも由来するであろうが、当該期の土器生産量・消費量の増大として考えることもできる。住居址の数も多い（挿図13～挿図17）。

曾利新式段階に至ると、土器すてばAの機能が著しく高まる。この時期の住居は比較的集落西側に多く、東側に少ないこと（挿図18～挿図22）と関連させて説明することが可能である。さらにこの時期には土器すてばCも存在している。

ちなみに後期・堀之内式の時期には、土器すてばAとBの重量は逆転している。後期について安易な言及は避けるが、土器すてばBは中期終末に相対的に機能を減じ、後期に入っては廃棄の場としての使命を終息していたと考えられるのではないだろうか。

5. 要約と展望

記述が繁雑になってしまったので、簡単に要約する。

・釈迦堂遺跡群・三口神平地区の土器すてばA・Bについて、土器の接合関係の類型をもとに、往時の廃棄行動の復元を試みた。同一個体の土器がまとまっている場合は、土器の破損を動機とした廃棄を想定できる。単位廃棄

と認定できるブロックの内部に別個の土器さらには異型式の土器が含まれる場合は、集落内の破片の取り集め作業つまりは清掃活動を想定できる。同一個体の土器の破片が広い範囲で接合する場合は、それらが別の機会に廃棄されたであろうこと、即ち集落内で別々に清掃されたであろうことを想定できる。以上の様に筆者は、土器の破損・集落内清掃というごく普通に生じ得る動機にもとづく、ごく日常的な廃棄行動の集積が土器すてばであると考へた訳である。

- ・土器の重量計算・個体数試算の分析は興味深い結果をもたらしてくれた。土器すてばBが中期初頭から廃棄の場として機能していたのに対し、土器すてばAは藤内式期に土器すてばBと同等の機能を確立した。その出現の画期は前段階の新道式期に求められた。これは住居の西側への進出、つまり居住空間の拡大と関連づけられた。井戸尻式～曾利古式は土器すてばの土器量が増大し、土器すてばAとBは同等に機能している。曾利新式には土器すてばAの機能の増大著しく、相対的にBの機能が減じたが、これもまた住居が西側に多かったことに結びつけられた。以上の様に土器すてばの動態と集落の動態を関連させて論ずることができたのである。

最後に、現在までの土器捨て場の報告事例⁽¹⁰⁾に基づいて、若干のまとめと今後の方向性について述べてみたい。土器捨て場は次の様な性格を持つ。

- ・異型式に属する土器が、平面的にも層位的にも混在している。
- ・ほとんどが破片の形で存在する。完形土器はほとんど、あるいは全く含まれない。
- ・破片が散在するのに対し、完形土器や大形破片は同一地点につぶれることが多い。
- ・破片の接合距離は大きい。

上記の特徴は筆者の管見した限りの報告例のほとんど全てに共通する。釈迦堂にも全てあてはまる。すると基本的な土器捨て場像が明らかに見えてくる。今後はこの像をきちんと把握して土器捨て場を普遍的に論ずる必要がある。このような廃棄の場を持つ集落がいかなる性格のものであるか、定住性の問題を含めて論ずる必要がある。

従来の報告が言及した問題のいくつかを述べる。まず、土偶に代表される特殊遺物の集中を以て土器捨て場に宗教的意味を持たせる意見であるが、釈迦堂遺跡群・三口神平地区においてはそれを支持する積極的な根拠を得られなかった。土偶は土器すてばにも多いが、住居址覆土にも多い。つまり土器をはじめとする遺物が高い集中を示す所にまた土偶も集中するのであり、土偶のみに意味を持たせることはできない。ただし往時の廃棄行動が何らかの宗教的意識に裏打ちされていた可能性を否定することはできず、そういったメンタルな部分にいかに関わりあうのか、今後の課題となる。

次に、廃棄論の最重要問題は吹上パターンの理解であろう。同じく廃棄の場としての土器捨て場と、廃絶住居のくぼみとを比較し、その異同に言及した報告例もある（細田1982、長沢1986）。三口神平地区で認識した通り吹上パターン住居の遺物と土器すてばの遺物の内容に差異がないとすれば、両者の差異を廃棄の動機（廃棄の時）の違いに求めるのも一案であろう。敢えて言えば、日常生活の必要に応じて常に廃棄の場であった土器捨て場に対し、一住居の廃絶を機縁としてその住居の什器を一括して埋め戻したのが吹上パターン（の所謂完形一括廃棄）ではなかったか。いずれにせよ吹上パターンの内容の整理を待って、さらに議論を進めるべきである。

6. お わ り に

この論稿は、筆者が1987年度東京大学大学院藤本強教授の演習において発表した内容をまとめたものである。貴重な助言を与えてくださった藤本教授はじめ先輩後輩諸氏に感謝する。

註

- (1) 土器すてばCは時期的に限定される土器が小規模に集中する。一方土器すてばA・Bは遺跡に存在する全型式を網羅し、規模も大きい。
- (2) 三口神平地区には前期初頭・下吉井式期の住居址10棟が存在するが、五領ヶ台式までの空白期間の長さを考慮すれば、土器すてば

を中期の所産と考えてよからう。

- (3) 土器すてばBについても多数の接合関係を確認しているが、接合図を作るところまで作業を進めることができなかった。
- (4) 小林達雄氏は、土器廃棄の認定は出土状況の検討により果されるとしてパターン論を展開した（小林1974）。同じ論文の中で土器廃棄の3つのケースが想定されており、そのうちケース1と3がパターンD（可児1969の平和台パターン）と結びつけられている。以後に説明する筆者の分析から導かれた廃棄行動も、小林氏の想定と共通した部分があった。小林氏の論の主眼は吹上パターンの理解にあった訳だが、廃棄の動機や時（特定の時の有無）に言及する点など筆者にとって参考になった。
- (5) 直接接合しなくとも明らかに同一個体と識別した例を含む。
- (6) 厳密には完形と言える土器は皆無である。口縁から底まで一通り残存し原形がわかる程度にまとも出土したものを完形と呼ぶことにするが、この例も少ない。
- (7) 所沢市高峰遺跡の報告（並木他 1984）では廃棄の同時性を認定すべきブロックについて、その内容を検討している。
- (8) 集落景観の復元を重視する中野氏はかなり具体的な陳述をする。「ゴミ」の内容として生ゴミや木の葉、枯れ枝等を含めたゴミ捨て場像を構築しているが、釈迦堂における分析ではそこまで論を進めることができなかった。よってゴミという語の使用も避けた。中野氏の論で注目すべきはむしろ、一次廃棄としての住居周囲への廃棄と、二次廃棄及び多次廃棄による土器捨て場への廃棄という図式を描いたこと、後者の一環として祭祀遺物混入の意味を考えたことであろう。
- (9) ただし土器すてばBの位置は五領ヶ台式期の住居とはだいぶ離れている。この時期に土器すてばBの存在を想定するには無理があることも確かである。その場合、S-Ⅳ区S B-73の出現する猪沢式期をBの初現と解釈することができる。しかしここでは叙上の様な計算結果を論拠としているため、特に五領ヶ台式と猪沢式の両期を区別することはしないでおく。
- (10) 参考とした報告事例は、東京都新山遺跡（後藤1981）前田耕地遺跡（松井他1981）多摩ニュータウンNo.3遺跡（小葉1982）東寺方遺跡（山崎他1983）埼玉県増善寺遺跡（細田1982）高峰遺跡（並木他1984）神奈川県帷子峯遺跡（柴他1984）山梨県釈迦堂遺跡群野呂原地区（長沢1986）長野県扇平遺跡（会田他1974）荒神山遺跡（伴他1974）与助尾根南遺跡（鵜飼他1980）居沢尾根遺跡（青柳他1981）などである。

引用参考文献

- 会田 進 他 1974 『扇平遺跡』岡谷市教育委員会
- 青沼博之 他 1981 「居沢尾根遺跡」『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書——原村その4——』
長野県教育委員会
- 鵜飼幸雄 他 1980 『与助尾根南遺跡』茅野市教育委員会
- 可児通宏 1969 「住居の廃絶と土器の廃棄」『多摩ニュータウン遺跡調査報告Ⅶ』多摩ニュータウン遺跡調査会
- 小葉一夫 1982 「埋没谷における中期の遺物出土状態」『多摩ニュータウン遺跡——昭和56年度——（第5分冊）』東京都埋蔵文化財センター
- 後藤祥夫 1981 「新山遺跡における遺物遺存状態の観察」『新山遺跡』東久留米市教育委員会
- 小林謙一 1983 「遺跡出土の土器の量的把握に関する試論」異貌第10号
- 小林達雄 1974 「縄文世界における土器の廃棄について」國史学第93号
- 柴 哲 他 1984 『帷子峯遺跡』横浜新道三ツ沢ジャンクション遺跡調査会
- 長沢宏昌 1987 『釈迦堂Ⅲ』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第22集
- 中野修秀 1984 「土器捨て場考(1)」日本考古学研究所集報Ⅵ
- 並木 隆 他 1984 「高峰遺跡の調査」『椿峰遺跡群』所沢市文化財調査報告書第12集 所沢市教育委員会
- 伴 信夫 他 1974 「荒神山遺跡」『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書——諏訪市その3——』
長野県教育委員会
- 細田 勝 1982 「遺物包含層（土器捨て場）について」『増善寺遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第5集
- 松井和浩 他 1981 『前田耕地Ⅲ』前田耕地遺跡調査会 秋川市教育委員会
- 山崎和巳 他 1983 『東寺方遺跡』多摩市教育委員会

まとめの参考文献

早期末～前期初頭の土器

- 渋谷昌彦 1982 「木島式土器の研究」『静岡県考古学研究』11
1983 「神之木台・下吉井式土器の変遷」『小田原考古学研究会会報』11

中期前半の土器

- 佐藤達夫 他 1975 「勝坂式成立の問題点」『北奥古代文化』8
谷井 彪 1977 「勝坂式土器の変遷と性格についての若干の考察（前）（後）」『信濃』29-4・6』
鈴木保彦 1981 「勝坂式土器」『縄文土器大成』2
谷井 彪 他 1982 「縄文中期土器群の再編」『研究紀要』埼玉県埋蔵文化財事業団
寺内隆夫 1984 「角押文を多様する土器群について」『下総考古学』7
小林謙一 1984 「中部・関東地方における勝坂阿玉台式土器成立期の様相」『神奈川考古』19
下総考古学研究会 1985 「勝坂式土器の研究」『下総考古学』8
鈴木保彦 1985 「勝坂式土器の展開」『日本大学芸術学部紀要』
森本伊知郎 1985 「勝坂式土器の文様構成について」『信濃』37-4
三上徹也 1986 「中部・西関東地方における縄文時代中期中葉土器の変遷と後葉土器への移行」『長野県考古学会誌』51

中期後半

- 能登 健 石坂 茂 1980 「重弧文土器の系譜」『信濃』32-4
神奈川考古同人会編 1980 「縄文中期後半の諸問題－土器資料集成図集」『神奈川考古』10
米田明訓 1980 「南信天竜川沿岸における縄文時代中期後半の土器編年」『甲斐考古』17-1
神奈川考古同人会 1981 「縄文中期後半の諸問題」『神奈川考古』11
末木 健 1981 「曾利式土器」『縄文文化の研究』4
米田明訓 1986 『柳坪遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第13集
長沢宏昌 1986 「曾利Ⅰ式大渦巻把手成立の一要因」『山梨県考古学論集』Ⅰ
三上徹也 1987 「唐草文土器の成立とその分布」『歴史手帳』

埋甕

- 猪越公子 1973 「縄文時代の住居址内埋甕について」『下総考古』
佐藤 洋 1976 「縄文時代の埋甕習俗」『物質文化』27
田中 信 1982 「埋甕形態論」『土曜考古』6

耳飾り

- 高山 純 1967 「縄文時代に於ける耳栓の起源に関する一試論」『人類学雑誌』73-4
藤田富士夫 1971 「耳栓の起源について」『信濃』23-4
百瀬長秀 1979 「土製耳飾に関する諸問題」『信濃』31-4